

かけがえのない山、川、里。生命めぐる、我が美しきふるさと。  
映像とエッセイでつづる、人と家と暮らしの物語。

# 志 太 平 野



五

虚空蔵さん<sup>こくぞう</sup>と  
漁師守り神のお膝もと。

焼津市 浜当目



編集人／杉村喜美雄（ハイホームス）  
撮影／村山正良（M2WORKS）  
文／岡本國治（岡本戦略広告事務所）

中央：虚空蔵山登り口から弘徳院、家並、駿河湾を臨む。 右上：大正期のカツオ船絵馬（那閉神社蔵）

浜当目は遠目。遠くを見渡せる浜を意味するそうです。その海は、深さのためか、岸からすぐに濃いコバルトブルーに染まって、空の青より神秘的な色をしています。小泉八雲が、焼津の海に母の生地であるギリシャの海を重ね見て、この地を深く愛したのもうなづける色です。

かつてこの砂浜は長く、夏の盛りに足裏が灼けるのをさけるために、子どもたちは南瓜の葉を用意して、海に入るまで踏み石のように使っていたとか。現在では、防波ブロックの効果で、浜は短い急坂になり、波は砂というより小石を洗いながら打ち寄せています。

海は変わらない。浜辺は変わる。変わらないようにみえて、少しずつ変わっていくのが人の世なのでしょうか。

浜当目で、海と同じく揺るぎないものが、虚空蔵山。北の方角に、海中から緑豊かな樹林の壁を立ち上げています。山頂には虚空蔵菩薩（現在は麓の弘徳院に移動）、麓には那閉神社が祀られています。この那閉神社は、海中に突き出た小さな半島（鍋崎）に鎮座していたものを、波濤から守るために文政三年（一八二〇）に現在地に移されたといえます。

海と山と瀬戸川河口に囲まれた浜当目は、「島のようなもの」といいます。いや、孤立しているからこそ、浮き世（町）と一線を画した離れ座敷のように、浜当目は海の氏神様、山の

菩薩様に見守られた聖地の感があります。現在でも、静岡市街と焼津市街を結ぶ国道一五〇号線を一步浜当目内部に入ると、車の往来は少なく、穏やかな空気に包まれています。

「浜当目に生まれた男は漁に出るもんだ」。明治末期から昭和三十年代まで、浜当目は遠洋カツオ漁業の村として賑わってきました。今川時代以来の製塩、そしてシラス、鰯漁の村が突然の変貌を遂げたのは、塩が専売品に定められて製塩業がうまくいかなかったことと、遠洋への出漁を可能にした発動機船が開発されたことによるようです。全盛期の昭和三十年代中頃には、浜当目だけで十一ほどの船元があり、二十隻近いカツオまぐろ船を有していました。

二月の虚空蔵さんの縁日が終わると、那閉神社に出船参りをして航海無事の御祓いを受け、出港するときには虚空蔵山沖に船を回し、舳先から洗米を撒いて拝礼し、鹿児島沖方面へ出漁して行きました。「神社の秋の大祭には、どの船も必ず一週間前には帰ってきた」。また、男たちを送り出した女性には、「農作業を終えた後、毎夕、弘徳院と那閉神社へ、参拝を欠かさなかった」。それほど、虚空蔵さんと地元の氏神様に寄せる人々の信仰は、きわめて厚いものでした。

ムラウチ（村内）と外との往来に地形的な制約があると、ムラウチの精神的な結びつきは強くなります。「当目中が親

威」という意識があり、風呂を互いに「貰い湯」し合う習慣がありました。燃料とするタキギが貴重な時代のことです。

浜と山・川にはさまれた土地にはおのずと限りがあり、道は狭く、家々は密集しています。しかし、それが窮屈さを感じさせないのは、よく手入れされた植栽や庭が多く、美しい緑が目につくから。槇の生垣は、防風・防潮の役割も果たしています。必要以上の敷に思える小道は、浜から入る高潮を逃がすため。中には人も通れないような道もあり、これらは水を逃がすだけでなく、隣家との緩衝帯にもなっています。

「道の両側にあった水路にフタができたおかげで、ずいぶんと道が広く感じるようになった」とは、地元の方のお話し。この方にはまた、浜側から人家へ下る小道の入口に設けられた、堰の跡を案内していただきました。堤防と村の境には、水の侵入を防ぐコンクリート塀があり、小道入口では、この塀が途切れています。そこで、塀の両側にミゾをつくり、万一の時に板をはさみ込むようにしたのが堰です。でも、この堰が実際に使われたことは、ほとんどなかったようです。

水と戦い、海に暮らし、山の虚空蔵さんと浜の氏神様に祈ってきた暮らし。浜当目は、変わるものと変わらないものの間で、明治、大正、昭和の時代を越え、平成の今、再び静けさを取り戻し、街の奥座敷の趣を深くしています。



















































